#### <基調講演>

# 場の理論と言語

(2013.1.26)

早稲田大学 大塚正之

- 1 場の理論の背景
  - ○東洋的考え方

言葉に囚われず、あるがままの感覚的な事実を見る姿勢 無分別の分別(鈴木大拙)

○現象学の視点

相互身体性(モーリス・メルロ=ポンティ)

現象学的社会学一沈殿(アルフレッド・シュッツ)

共同存在(マルティン・ハイデガー)

○脳科学の視点

マインド・タイム(無意識の支配・ベンジャミン・リベット)

ミラー・ニューロン (自他共感性・マルコ・イアコボーニ)

- ○共通する要素
- ーデカルト的二元論・要素還元主義からの脱却ー

主客非分離(こころ=ことばと身体は分かれていない)

自他非分離(生命は分けても分からない)

### 2 場の理論の視点

ことばは原始人の共同生活をする場の中で生まれた

音声・身ぶり-家族共同体(氏族共同体)における日々の生活 サルなど集団生活をする動物-非言語的なコミュニケーション 動物における共感性(フランス・ドゥ・バール)

朝の夫婦の会話「新聞は!」「椅子の上よ!」

電車の中での夫 「新聞は!」「・・・・・」

客観的状況に意識的な又は無意識的な主観的認識が加わった状況 の全体=場

場においては、主観と客観とが交錯し、様々な情報や感情が共有 されている。

場においては、主観と客観とが相互に一体的に相互作用しており、 自分と他人とも相互に一体的に作用している。

コミュニケーションを可能にする「場」があれば、言語がなくて もコミュニケーションは成立する。

言葉の具体的な意味の持つ差異性と同一性

身体動作・無意識的コミュニケーション

諸要素の複雑な相互作用が正確な情報伝達を可能にする。

### 3 場の理論からみた言語

場の理論は、コミュニケーションは、無意識的な身体動作、情報の蓄積、音声の発話、手の動きなど、広い意味での身体的な行為によって可能になると考える。

コミュニケーションを可能とする条件

自他非分離的な共感性 母子相互作用からの自我の成立

(ex ミラー・ニューロン)

(Michael A.Arbib"how the Brain got Language \_The Mirror System Hypothesis"oxfrd2012 参照)。

複雑系 (complex system) における自己組織化 (self-organized) としての活動

生命体における自己組織化システム 社会現象にも適用る。

複雑系においては、多くの要素の動的な関係を個々の独立した過程に切り離すことができないのである。その全体を場と捉える。

主体がまずあって、その主体が感情移入によって他者を認識するのではない。先に共同存在という場があって、その場における共同存在性が他者の認識を可能にする。

(以 上)

2013年1月26日

# 身体的覚知における無主語の転回 第1回場の言語研究会(於早稲田大学) 永田 鎮也

- 1.「松の木を真直ぐに見る」という公案 一休と蓮如の逸話
- 2. 新陰流の世界1)、2)

無形の位(むけいのくらい)、直立つる身の位(つったつるみのくらい)

人中路(じんちゅうろ):身体の中心線

十文字勝ち(じゅうもんじがち):

合撃 (がっし):

一刀両段(いっとうりょうだん):自分の中心線を截り徹すことで、彼我共に截る 四方正面と四面楚歌:

三箇捧(さんかほう): 截ろうと思う心、防ごうと思う心、危ぶむ心を敵に捧げる袋竹刀に込められた願い一真の道具とは-2):

3. 浄土真宗の世界

正像末和讃の恩徳讃

「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし」

「粉骨砕身」の感謝とは:

必ず救うということ:

4. 身体的覚知の構造3)

世界の二重性とは: 世界内存在と虚空/世界に於ける存在の違い

身体的覚知とは:

- ①世界の大地に立ち、彼方の地平を認知することで立ち上がってくる主題を(我は)
- ②地平認知により感じられる虚空/世界へと転ずることで(我ならずして)
- ③新しいことばや主題となって再び世界へと回帰し、照射される知(我なり)
- 5. 参考文献
  - 1) 柳生延春 1999『柳生新陰流道眼』島津書房
  - 2) 永田鎮也 2003 『痛みからの創出』 Mind-Body Science, No.13
  - 3) 上田閑照 1997 『ことばの実存』 筑摩書房